

生徒の「やればできる」を 学校全体で支援し、 自己実現への意欲を醸成

変革のステップ

背景と課題

- 学力や生活習慣に課題のある生徒が増える傾向にあった。そうした中で、自分に自信が持てない生徒も目立つようになっていた

実践内容

- **「Reスタ」** 週4日、1・2年生全員が数学・英語の学び直しに取り組む「Reスタ」の時間を正課として位置づけ、全教師が連携して指導する体制を構築
- **キャリア教育** 自分のよさに目を向ける→将来の展望を描く→興味のあることに挑戦するという段階的なカリキュラムを作成。「未来デザインコース」の2・3年次には、生徒が自分のやりたいことの実現を目指す「ミラクルプロジェクト」に取り組む
- **「i-Koryo」** ICTサービスを活用し、授業の板書の写真や提出物などを、生徒に毎日配信する取り組み「i-Koryo」を推進

成果と展望

- 自分に自信を持ち、学習に前向きに取り組む生徒が増えた
- 教師の生徒理解が深まった

富山県・私立高岡向陵高校は、高い目標を持ち、困難を恐れずにその実現を目指す人材の育成に力を注いでいる。生徒は明るく素直だが、近年は地域の人口が減少する一方、入学定員数に大きな変化はないため、学力や生活習慣に課題のある生徒が増える傾向にあった。そうした中、自分に自信が持てず、「自分には難しいかもしれない」と思って、第一歩が踏み出せない生徒も目立つようになっていた。生徒に成功体験を積みせようと考え、指導を工夫する教師もいたが、学力の多層化への対応が難しく、思うような成果が上がっていなかったという。

生徒の主體的な進路選択に向け、 成功体験の積み上げを目指す

PROFILE



校訓に「努力・勇気・誠実」を掲げ、時代の要請に応じながら、生徒個々の能力を最大限に伸ばす教育の実現を目指している。部活動も盛んであり、ハンドボール部や相撲部、陸上競技部などが全国大会への出場実績を持つ。

設立 1962 (昭和37) 年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約185人

2018年度進路実績(現役のみ) 私立大は、慶應義塾大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ33人が合格。短大、大学校・専門学校進学50人。就職56人。

住所 〒933-8538 富山県高岡市石瀬281-1

電話 0766-23-0762

Web site <https://takaokakoryo-h.ed.jp>

そこで、2017年度、コースを「未来デザインコース」「未来探究コース（*1）」に再編したのを機に、全校を挙げた指導改善を始めた。吉野ひろみ教頭は、次のように語る。

「生徒が本道に進みたい道を見つけ、それに挑戦するためには、自分の可能性に気づかなければなりません。そこで、生徒一人ひとりが『やればできる』という実感をえられるよう、学力向上とキャリア教育を中心に、取



富山県・私立高岡向陵高校教頭
吉野ひろみ よしの・ひろみ
 教職歴20年。同校に赴任して14年目。「何事も生徒とともに楽しむ。生徒が1つでも多くの成功体験を積めるよう支援する」



富山県・私立高岡向陵高校
藤川武命 ふじかわ・たけのり
 教職歴10年。同校に赴任して11年目。情報管理部長。「黒板からICTまで、よいものは何でも活用する教育を実践する」



富山県・私立高岡向陵高校
薬師陽子 やくし・ようこ
 教職歴10年。同校に赴任して8年目。3学年主任。「生徒に寄り添って長所を伸ばし、生徒が堂々と次のステージに進めるよう支援する」



富山県・私立高岡向陵高校
村上文代 むらかみ・ふみよ
 教職歴10年。同校に赴任して6年目。ミラクルプロジェクト主任。「生徒の憧れとなるような、カリスマ性のある人間、教師でいたい」



富山県・私立高岡向陵高校
久崎稜太 きさきりょうた
 教職歴4年。同校に赴任して2年目。「生徒の長所も短所もすべて受け入れ、あらゆる可能性を見つけ出せるよう指導する」

「Reスタ」を学校全体で推進

学力向上対策としては、週4日の昼休み後の15分間を、1・2年生全員が中学校段階の数学・英語を学び直す「Reスタ」の時間とし、それを正課に位置づけた。「ReStart（再び始める）」「ReStudy（再び学ぶ）」「ReStar（再び輝く）」という意味を込めて命名したという。各教科で週単位のプログラムを作成し、生徒の課題にきめ細かく対応できるよう、約20もの習熟度別の少人数制クラスを両学年合同で編成。管理職も含めた全教師で指導する。4日間の流れは、1日目・2日目にプリント教材を用いた講義、3日目にプレ確認テスト、4日目に確認テスト「リンクアップチャレンジ」を行うというものだ。「量」を可視化して達成感につなげるべく、プリントやテストは各自でファイルに蓄積させている（図）。

Reスタ推進の中心メンバーである久崎稜太先生は、こう述べる。

「リンクアップチャレンジの結果により、毎週、クラス替えを行います。頑張りがすぐに形として表れるため、勉強が苦手な生徒も前向きに取り組んでいます。そうした意欲をさらに伸ばせるよう、今後は上位のクラスに入った生徒を定期的に表彰する予定です」

Reスタを始めるにあたっては、教師間の合

り組みを充実させていくことにしました」

「Reスタ」のチェックシート

基本ベース		1日目	2日目	3日目	4日目
		Reスタ1	Reスタ2	RUCプロ	RUC
数	H	4	15	16	18
英	F	13	13	15	16
数	E	18	19	20	20
英	J	25	26	27	29
数	C	2	3	4	6
英	A	9	10	11	11
数	C	23	24	25	27
英	H	30	31	32	3
数	B	8	8	10	14
英	G	14	15	16	17

右上の「Reスタ」は、頑張る生徒を応援する、学校のオリジナル・キャラクターである。生徒が達成感を得られるよう、毎回チェック欄を設け、教師が署名・捺印する。学力の変化を意識するため、Reスタのクラス(Rank)欄は生徒自身が書く。

* 学校資料を基に編集部が一部改編

意形成を図るため、17年2～3月に試行期間を設けた。そうして学年や教科を横断した指導を実現したことで、教師の生徒理解も深まっている。例えば、英語の教師が数学を教えると、「この生徒は、英語は苦手だけど、数学はよくできるんだ」といった新たな発見があるという。また、授業を担当していない学年の生徒の、顔と名前的一致する数が増え、生徒とのコミュニケーションが緊密になった。3学年主任の薬師陽子先生は、17年度のReスタをこう振り返る。

「生徒一人ひとりが着実に基礎を固めていく様子がよく分かりました。そうした中で、当初は担当外の教科の指導に戸惑っていた先

* 1 2018年度からの名称。17年度時点では「文理探究コース」。

生も、次第に積極的になっていきました。他教科の先生が、数学・英語の先生と、よりよい教え方について話し合うことも増え、教師間の結束が強まったと感じています」

生徒が将来の展望を描けるよう、自分自身と向き合う場を設定

キャリア教育では、自分のやりたいことを具体化し、その実現を図ろうとする意欲を醸成できるよう、段階的なカリキュラムを練り上げた。

1年次には、全コースで「総合的な学習の時間」を中心に、生徒が自分と向き合う活動力を入れる。1学期のテーマは、「自分のよさを知ろう」だ。まず、生徒がクラスメート全員のようにところを書き、担任はそれを基に、「優しい人」「クラスを盛り上げてくれる人」といったグループを作る。そして、グループごとに、メンバーが互いの長所、それを感じた場面や理由などを具体的に挙げていく。情報管理部長の藤川武命先生は、次のように話す。

「自分の長所は、自分では気づきにくいものですが、クラスメートから説明されると、生徒はそれを意識するようになります。うれしそうな表情がしばしば見られ、自己肯定感が高まっていると感じました」

2・3学期には、「自分は何に興味があるのか」を探究し、それに関連する大学や専門学校を訪問したり、地域企業の校内講演会を聞いたりして、学問・職業調べを行う。一人ひとりの気づ

きをクラスで共有するため、その学問・職業に必要とされる資質や技術を解説したり、感想を述べたりする場を定期的に設けている。

「取り組みの中で、社会人の基本となる時間の厳守やきちんとした身だしなみの重要性を学び、自主的に実践するようになる生徒も目立ちます。学校外の人たちとの交流を通して、生徒が大きな刺激を受け、行動に反映させていると実感しています」（薬師先生）

生徒が自分の夢の実現を図る「ミラクルプロジェクト」

2・3年次は、コースごとに取り組みを行う。未来デザインコースでは、月・木・金曜日の5・6限目を、キャリア教育に特化した学校設定教科「キャリアアップ」とし、生徒が自分の夢を形にする「ミラクルプロジェクト」に挑む。18年度の2年生は、生徒のやりたいことを基に設定された「地域貢献」「学校にカフェをつくらう」といった11のグループに分かれ、それぞれの計画を推進中だ。

ミラクルプロジェクト主任の村上文代先生は、取り組みの目的をこう語る。

「社会に出れば、何事も主体的に判断して動かなければなりません。そこで、自分たちで計画を立て、長期的な見通しを持って実行していくという経験を積ませようと考えました。実現しそうかどうかにかかわらず、生徒の自由なアイデアを大切にするという方針を

立て、教師は脇役に徹しています」

全学年の教師十数人から成るミラクルプロジェクトチームの中で担当グループを割り当て、教師は自分が担当するグループの計画の進め方について、生徒からの相談に応じる。例えば、生徒が外部の専門家の指導を受けたいと望めば、計画の内容に応じてどのような職業の人が適しているかを助言するが、人選や選んだ専門家への連絡は生徒が行う。ファクションショー「高岡向陵コレクション（TKC）の開催」を目指すグループでは、ヘアメイクアーティストからヘアメイクの仕方を学んだ（写真）。

9月の文化祭では、これまでの取り組みの発表として、グループごとのプレゼンテーションやポスターセッションなどを予定している。

写真 ミラクルプロジェクトでは、専門家への依頼を始めとする外部との交渉も、すべて生徒自身で行う。TKCを企画するグループは、自分たちでモデルにメイクができるよう、メイクの仕方について専門家から指導を受けた。

* 2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。
* 3 ベネッセの教材「進路マップ」の1つ。GTZ（学習到達ゾーン）という指標で、生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性（自我同一性）を測る、生活・学習指導用テスト。

生き生きと動いています。グループ内の意見調整や外部との交渉など、うまくいかないことも出てくるでしょうが、そうした時の試行錯誤が貴重な経験になります。文化祭での発表を、半年間の取り組みを振り返り、内省を深めるきっかけにしてほしいと思っています」(村上先生)

未来探究コースでは、1年次に描いた将来の展望を、大学の学問と結びつけて考えられるよう、学校設定教科「人文社会課題探究」「自然科学課題探究」で、国語、地理歴史・公民、数学、理科、英語のいずれか、もしくは複数の教科にかかわる発展的なテーマをグループごとに設定し、探究を進めながら、定期的にその成果を発表する。

「生徒には、1つのテーマでも多角的に分析できるという、学問の本質的な面白さを目指すというのを目指しています。そこで、教科の学習内容を組み合わせ、考える場を設けました。知識の活用がより重視されている大学入試への対応にもつながると考えています」(藤川先生)

「Classi」を活用し、生徒に応じた指導をさらに推進

18年度には、学力向上・キャリア教育と並ぶ指導改善の3本目の柱として、教科担当と担任が連携し、生徒一人ひとりの学習を支援する「i-Koryo」を始めた。教科担当は、毎回の授

業の板書を写真に撮影したり、小テストの問題を画像化したりして、提出物の連絡事項とともに、担任と共有する。担任は、毎日の放課後に、それらを「Classi」(*2)でクラス全体に配信する。定期考査前には、各教科担当がポイントを解説した動画をClassiにアップロードする予定だ。取り組み名の「i」には、「愛」「I(私)」「ICT」といった意味が込められているという。

「欠席した生徒にも、その日の学習内容や連絡事項が分かるよう、学校からの情報発信を充実させたいと考えました。本校には、不登校を経験した生徒もいるので、不安を抱えている生徒と個々に連絡を取り合う時は、メッセージ機能を使っています。欠席しがちな生徒との連絡については、学校全体での実施へ向け、先生方との合意形成を進めています」(藤川先生)

Classiは、家庭学習の習慣化を目的として、14年度に取り入れた。当初は、教師のICT活用状況に配慮し、Webテストのみを導入していたが、次第に、校内グループ、生徒カルテと、生徒の課題に応じて活用する機能を広げていった。その原動力となったのは、新たな機能を率先して取り入れた若手教師だ。球技大会で頑張る生徒の写真や、ボランティア活動に参加した生徒の振り返りなどを、コメントを添えて積極的にClassiで配信。管理職が職員会議などでそうした実践を褒めたこともあり、同じように活用する教師が増えていったという。

生徒一人ひとりを大切にしたい 指導の実現を目指していきたい

一連の指導改善により、生徒の様子には顕著な変化が見られる。自分に自信を持ち、何事にも前向きに取り組む生徒が増加し、引っ込み思案だった生徒も、授業で積極的に発言するようになったという。キャリア教育における生徒の生き生きとした姿は、前述した通りだ。そうした意欲は学力向上にも結びつき、18年度の2年生では、ベネッセの「基礎力診断テスト」(*3)において、GTZ(*4)がDゾーンの生徒が減少した。教師間の連携も強化され、学年や教科を超えた生徒の実態把握が進んでいる。

大きく実を結びつつある同校の指導改善だが、今後はさらなる充実を目指す。18年度には、Classiのポートフォリオ機能の活用を進展させ、キャリア教育の振り返りを始めとした、あらゆる教育活動の成果の「見える化」を計画した。また、ミラクルプロジェクトでは、生徒を多面的・総合的に評価できるよう、ルーブリックの作成を進めている。吉野教頭は、今後について次のように語る。

「生徒は日々成長しているため、それに応じて、教師の指導も絶えず変えていく必要があります。指導改善に終わりはありません。これからも、先生方と力を合わせ、生徒一人ひとりに寄り添う指導を充実させていきたいと考えています」

*4 ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。